

令和8年度 学校推薦型選抜

小論文

試験問題

教育学専攻

注意事項

1. 監督者の指示があるまで、試験問題を開いてはいけません。
2. この試験問題の表紙に記載されている専攻が、自分が受験する専攻と一致しているか確認してください。
3. 試験問題と解答用紙は別になっています。
4. 試験問題は表紙を除いて9ページ（下書用紙を含む）、解答用紙は4ページとなっています。落丁、乱丁及び印刷不鮮明な箇所等があれば、すぐ申し出てください。
5. 監督者の指示に従って、解答用紙すべてのページに受験番号を必ず記入してください。氏名を記入してはいけません。
6. 解答に字数制限がある場合、句読点は字数に数えます。
7. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。試験問題は持ち帰ってください。
8. その他のことについては、監督者の指示に従ってください。

教育学専攻

(9枚の1)

問題1

次の文章を読み、続く2つの問いに答えなさい。

教育は、賃金の引き上げを考える上でとても大切なものです。さらにイノベーション(*)による短期的な格差の拡大を小さくし、イノベーションの恩恵を早くに広く社会に浸透させる点でも、教育が大切です。もう少し具体的に言えば、イノベーションへの投資と、教育投資が競争状態にあることが重要なのです。少し見ていきましょう。

賃金は、その人のスキルに対する需要と供給によって決まります。例えば、高いスキルへの需要が多く、それに対する供給が少ない場合には、高スキルの人の賃金は上がります。低スキルへの需要が減る状況で供給が豊富にある場合には、低スキル人材の賃金は下がります。

ノーベル賞を受賞した経済史が専門のクラウディア・ゴールディンらは、アメリカでイノベーションが生み出されながら、必ずしも1970年代までは格差が大きく広がらなかったのは、そもそも高度なスキルに対する需要がそれほど大きくはなく、かつ、高スキル労働者の供給がその需要に見合うだけなされてきたからだと指摘しています。そのため、高スキルと低スキルの人の格差はそれほど広がらなかったのです。

しかし、1980年代以降、イノベーションに対する投資が増え続け、高度なスキルへの需要が高まりました。しかし、その需要の高まりに供給が追いつかなかったために、高スキルの人の所得は増え、低スキルの人との格差が広がりました。

だからこそ、賃金格差を小さくするためには、イノベーションを止めるのではなく、イノベーションが高いスキルの人材への需要をつくり出す前に、教育投資を行いスキルの底上げをしておくことが大切なのです。これが、イノベーションと教育の競争です。

イノベーションが次々と生み出されている状況で、もしも、教育投資の水準を落としてしまうと、高スキルの人材の供給が需要に対して小さくなります。そうすると、高スキルの人材の所得が上がり、格差が広がります。この点で、スキルアップやスキルチェンジの促進は、その当事者だけでなく、社会的にも大切なのです。

*イノベーションとは、「経済的な価値を生み出す新しいモノゴト」を指す。

出典：清水洋『イノベーションの科学：創造する人・破壊される人』中央公論新社、2024年、215、216頁、一部改変。

教育学専攻

(9枚の2)

問1.「イノベーションへの投資と教育投資の競争（状態）」の説明にあたる部分を、本文中から 50 字程度で抜き出しなさい。

問2.「学校教育の一番重要な目標は、将来高賃金を獲得できるような高いスキルを子どもたちに身につけさせることだ」という意見に対して、賛成または反対の立場を明確にしたうえで、そう考える理由を 300 字程度で述べなさい。

教育学専攻

(9枚の3)

問題2

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

ビジネス書や育児書などには「ほめて伸ばす」といったスローガンが躍る。確かに、その主張には心理学の裏づけがある。ほめ言葉は心理学で言語報酬とも呼ばれ、金銭報酬と同等、あるいはそれ以上にやる気を高めるとされている。

誰でもほめられればうれしい。人は、ほめ言葉によってポジティブ感情を抱くように生まれついているのである。しかも、ほめ言葉は単なる報酬ではない。金銭やご褒美のプレゼントとは異なり、人と人とのコミュニケーションプロセスで生じるという特徴がある。

なぜ、ほめ言葉がモチベーションを左右するのか。それは、フィードバックの役割を果たすからだ。フィードバックとは、結果に関する情報が伝達されることでその後の行為が調整される現象を指す。特に、モチベーションの観点からいうと、「いいね!」「よくできました」といった言葉がけが、自己効力や有能さの感覚を高めたり、ポジティブ感情を感じさせたりすることでやる気を高める。このように環境側が提供するフィードバックがモチベーションを強く規定し、パフォーマンスをも向上させるという事実については、本書でもしばしば確認してきたところである。

ただし、やみくもにほめればよいというわけではない。よいほめ言葉とは何かを考える鍵は、フィードバックに含まれる意味内容、すなわち、フィードバック情報に隠されている。

[中略]

フィードバック情報には4つのタイプがある。まず、「遂行フィードバック」とは、行為自体やその結果に関する評価情報を提供する場合を指す。それがポジティブな情報（「正解です」など）で、当人の有能さの感覚や「次もできるはずだ」といった期待を高めるならば、モチベーションを促進するだろう。一方、それがネガティブな情報（「間違っています」など）だとしても、「どうすればうまくいくか」といった修正を促す情報（後述の「方略フィードバック」）もあわせて提供することによって成功への期待が維持され、有能さの感覚さえ失われなければ、モチベーションを高める可能性がある。また、「失敗」や「誤り」はネガティブに受け止められがちであるが、むしろ「進捗が不十分だ」という情報としてとらえるべきであり、このような「ダメ出し」の情報は、むしろ上級者やエキスパートに好まれるという。

「動機づけフィードバック」とは、「君にはできるはずだ」といった当人の能力に関する情報提供を指し、それがポジティブなものであれば、他者からの説得力ある情報として受け止められ、自己効力を高める可能性がある。

「あれだけ努力したからこそ成功したんだね」といった声かけは「帰属フィードバック」と呼ばれる。ここでの帰属とは、特定の結果に対する原因を判断する思考プロセス（原

教育学専攻

(9枚の4)

因帰属)を意味する心理学の専門用語だが、他者によるこのような判断をフィードバック情報として伝えることが、当人のモチベーションに影響を及ぼすことがわかっている。たとえば、課題に失敗する、問題が解けないなど、遂行の結果が好ましくなかった場合、「能力が足りないね」といわれるよりも、「努力が足りなかったね」といわれたほうがダメージは少ないに違いない。つまり、失敗時に、当人がコントロールすることが不可能な、あるいはかなり困難な要因(たとえば、課題の困難さ、能力不足)よりも、コントロール可能な要因(たとえば、努力不足)に原因帰属するようなフィードバック情報のほうが成功への期待を低下させることがないため、モチベーションを促す可能性が高いのである。

ほめ言葉と直接関係するわけではないが、特に効果的とされるのが方略帰属を利用する「方略フィードバック」である。これは、「失敗したのは、やり方が悪かったからだね」というように、成功や失敗の原因が方略にあると伝える帰属フィードバックの一種で、さらに「別の〇〇という方法を使うとよかったかもしれないね」というように、より適切な別のアプローチに関するアドバイスを加えることで、当人の注意を自分の能力ではなく課題の遂行それ自体に向けさせることができる。ひいては、当人が次回のアプローチを変えることで遂行のプロセスや成果が改善し、モチベーションを高めることにつながるのである。

つまり、よいフィードバックとは、ア

といった情報が含まれていることなのだとはいえるだろう。

フィードバック情報は、すべてのほめ言葉に含まれているとは限らない。ただ、優れたほめ言葉には良質のフィードバック情報が含まれているということだけは断言できよう。何がよかったのか具体的に伝えることで、ほめ言葉の潜在的な効力が発揮される。ほめ言葉は励ましのメッセージであると同時に、効果的なアドバイスでもあるのだ。

自然発生的なほめ言葉に特段の問題はない。ただ、注意も必要だ。「ほめればやる気が高まる」と断言できるほど、単純ではないのである。モチベーション研究の知見を整理すると、ほめ言葉にはプラス面のみならず、マイナス面もあることがわかっている。

[中略]

ほめ言葉には思わぬ盲点がある。たとえば、本人がほめ言葉に満足し「これでよい」と過度に正当化してしまったり、ほめ言葉をもらうこと自体が目的になってしまったりすることがある。また、人によっては、ほめ言葉をプレッシャーとして感じてしまう場合もあるだろう。

出典：鹿毛雅治 『モチベーションの心理学：「やる気」と「意欲」のメカニズム』中央公論新社、2022年、277頁—281頁、問題の作成の観点から一部の文や段落構成について改変を行っている。

教育学専攻

(9枚の5)

問1. 空欄アの個所に入る著者の主張を本文の他の個所から推測して、35字以内で述べなさい。なお、その際に、フィードバックに含まれるべきと著者が考える3つの情報に言及し、「何」、「どこ」、「どうすれば」という語を含むようにしなさい。

問2. 本文の著者の主張に基づいて、小学校教員として児童のやる気を高めるために授業や学校生活で児童をほめる際にすべき具体的な工夫や留意点について、300字程度で述べなさい。

5～9枚目は下書き用紙のため省略します。

令和八年度 学校推薦型選抜

小論文

試験問題

幼児教育専攻

注意事項

- 一．監督者の指示があるまで、試験問題を開いてはいけません。
- 二．この試験問題の表紙に記載されている専攻が、自分が受験する専攻と一致しているか確認してください。
- 三．試験問題と解答用紙は別になっています。
- 四．試験問題は表紙を除いて八ページ（下書用紙を含む）、解答用紙は三ページとなっています。落丁、乱丁及び印刷不鮮明な箇所等があれば、すぐ申し出てください。
- 五．監督者の指示に従って、解答用紙すべてのページに受験番号を必ず記入してください。氏名を記入してはいけません。
- 六．解答に字数制限がある場合、句読点は字数に数えます。
- 七．解答用紙は持ち帰ってはいけません。試験問題は持ち帰ってください。
- 八．その他のことについては、監督者の指示に従ってください。

幼児教育専攻

(八 枚 の 一)

次の問題文をよく読み、後の問いに答えなさい。

誕生直後から、子どもがもっている人への関心、人と関わることへの積極的態度は、どんどん強まっていきます。自分で動くことができないうちは、視線を送ったり、声をあげて相手の注意を喚起したりして、他者と関わろうとします。手を伸ばしたり、ハイハイしたり、ものを動かしたりすることなどができるようになると、興味をもった人の方に向かっていったり、手を差し伸べたり、ものを投げたりして、さかんに相手と交流しようとしていきます。おとな以上に自分と同じ子どもには興味津々で、その子の様子をじっと見ては、同じような動作をしきりに試みます。子どもの誰か一人がある動作をすると、まるでつられたように別の子が同じ動作をする、「共振」と呼ばれる現象です。こうして自分一人だけではしなかったこと、できなかったことを、他の子どもと一緒にいることで、次々と学んでいきます。

他の人が見た方向を自分も見と一緒に同じものをみる「共同注視」もかなり早くから行います。自分も指さして、他の人に見るように促したりもします。おもしろいこと、珍しいことは他の人と一緒に楽しんだり、他者と関心を共有したりすることが大好きなのです。さらに、見慣れない場所や見知らない人に出会うと、自分が知っている人の表情や行動を見て、安心したり、同じようにふるまったりするなど、「社会的参照」もできます。他人から情報を採り入れて、自分のために活用しているのです。

これらはいずれも、他者とともに学ぶ、他者から学ぶ行為ですが、これは人間だけがもっている知性であり、社会性なのです。このような高い能力をごく幼いうちからもっていることは、子どもが育つことの原動力となっています。こうした力を発揮する機会、あるいは集団の中で他とともに学び育つ機会が、家庭では決定的に不足しています。

すでに述べたように、少子化によって家庭におけるきょうだいとの交流も希薄となっています。少子化によって、二人きょうだいどころか、一人っ子も稀ではなくなり、それぞれ個室を与えられるのが一般的です。

このことは、親とも友だちとも違う、きょうだいという関係の中で、人とのつきあい方を学ぶ機会をなくしています。親と子は、「保護する・保護される」という上下の関係であり、甘えや許しが特徴です。子どもはいずれ多様な人間関係の中で生きていくこととなりますが、そこでは甘えや許しは、必ずしも通用しません。自分の意思をきちんと表明した

幼児教育専攻

(八 枚 の 二)

り、他者の意見も聞き、そして自分の意見を主張するか抑制するかを状況に応じて調整するといった対人ルールを習得していることが必要です。こうした力は、けんかする、仲直りする、協力もするが競争もするといった、きょうだいとの関係で育まれるものです。その機会が、きょうだいの数の減少と個室、勉強第一の生活によって急速に減りました。

加えて「ギヤング集団」といわれる異年齢の子どもたちとの遊びや活動も影をひそめました。「ギヤング集団」は長らく青少年心理学の重要なテーマでしたが、これも消滅してしまいました。異年齢集団といえば運動部のように、上下関係やルールが重視されるものが多くなりました。このような状況は、子どもの対人関係能力の未熟さをもたらししています。自分の気持ちをうまく表現できない、自分の意見を状況に応じて押したり退いたりする力が乏しい、すぐキレるといった行動にもみられます。現在深刻化しているいじめなども、そうした対人関係能力の未熟さと無関係ではないでしょう。

いま、さかんに行われている早期教育は、むしろ知育よりも社会的、対人的な面にこそ必要です。対人関係の力は、親や先生が教え込むことで身につくものではありません。子ども自身が試行錯誤し、他者のふるまいをみて体得していくものです。

かつては、家庭にいろいろな人が出入りしていたし、きょうだいもたくさんいました。また地域との交流もあり、そうした環境で、子どもたちは相手とつきあう術も学んできました。親の知らないところで子どもはけんかしたり、よそのおとなに叱られたり、他の子のやり方をみたり、といった体験を通して、対人関係能力を身につけていったのです。対人関係能力を育てるにおいては、親は極めて無力といってよいでしょう。したがって、今日、親ができることは、幼少時から、親以外の様々な年齢の者との交流の機会を積極的ににつくることにつきますでしょう。

最近、子どもの発達を説明する理論として「集団社会化理論」が注目されています。これまで子どもの発達に影響するものとして家庭や親が重視され過ぎました。子どもは親や家庭以外のいろいろな集団の中で自ら学び、外界の世界から大きな影響を受けることが実証的に明らかになっているのです。子どもは幼い時から多様な人への強い関心を持ち、他と交流することを楽しむ存在であり、自ら学ぶ力をもった発達の主体です。子どもは親のしつけの受動的な受け手ではありません。①「自らの発達の能動的プロデューサー」ともいえる存在です。また母の手だけ、あるいは家庭内だけの生活は、こうした子どもの豊かな

幼児教育専攻

(八 枚 の 三)

力と関心に応え切れず、子どもの育ちを阻んでおり、その意味で貧困な環境です。あらゆる問題を親のしつけのせいとするような風潮は間違いです。むしろ子育てを社会化していく意義はここにあります。

子どもの養育については、「誰がすべきか」はもはや最重要ではないこと、「母の手で」が至上でも絶対でもないことは、今日では明らかです。家庭が一番、母親との一対一が何よりとの考えは、偏見でしかありません。

保育園入所の基準に、「保育に欠ける」(注)というものがあります。すなわち、親がいない、あるいは、何らかの事情で養育できないなど、子どもが家庭での養育を受けられないことを指します。そして、この基準にあてはまる場合に保育園への入所が優先されます。しかし、いま「保育に欠ける」のは、母親がいない、あるいは母親が養育しないということだけではありません。母親が孤独に養育している「母の手で」が、往々にして子どもに望ましい十分な保育の質を欠きがちなことは、すでにみてきたとおりです。しかも、父親さえ育児不在の現状では、多様な人との交流や集団の中で育つ体験を家庭だけで与えることはできません。このような「母子隔離」的な環境こそ、むしろ「保育に欠ける」とみることもできます。

重要なのは、「誰が」よりも「どう関わるか」、すなわち養育・保育の質です。保育の質として重要なのは、子をよくみて理解し、それに基づいて応答的に関わることに つきます。それが子どもの積極的な生きる意欲と力を触発し、その育ちを活性化させます。この保育の質が子の養育に関わる人に求められる条件です。

日頃、子どもを育てている親は、この条件をもちやすい立場にあります。けれどもあまりに身近なだけに、かえって応答性をもてなくなってしまう危険性も大きいのです。子への熱い思いから、「先回り育児」が過速化するなど、親であるために陥りやすい欠陥も大きいのです。

したがって、子どもと程よい距離をもって、子どもをよくみて、子どもの立場にたって応答的に関わることでできる人、すなわち「社会的親」「心理的親」と呼べるような立場の人間が、子どもにとって必要です。保育者をはじめ、親以外のおとなが、幼いうちから子どもの育ちに関わることの重要性を認識し、そのような人と交流する機会を、社会的に創出することが、いま求められています。^②子育ての社会化、育児支援の目的はこうしたこ

幼児教育専攻

(八枚の四)

るにもあるのです。〔中略〕

集団の中で人間として大事な心と力を子どもがいかに豊かに学ぶかについて、たまたま出会った感動的なシーンを紹介したいと思います。

もう十数年あまり前のこと、ある保育園の自由保育の部屋の片隅で、子どもたちを観察していたことです。私のすぐ傍で、四、五歳の男の子たち三、四人が棒を振り回してチャンバラ遊びをしていました。そこへよちよち歩きの子どもが近づいてきました。チャンバラ遊びがとても活発なので、その子がどうなるか、男の子たちはどうするかとはらはらしていました。ところが、男の子たちの遊びが、ぴたりと止まりました。そしてその中の一人が、さっと飛び出していきました。何が起きたのかみていると、その子は部屋の隅へ行き、棚からおむつをとり、やがて先生を連れて戻ってきたのです。

いったい、なぜそんなことが起こったのでしょうか。私は、よちよち歩きで近寄っている子に男の子のチャンバラ遊びは危ないかと、ただ心配するばかりでした。ところが、その男の子には小さい子のおむつが濡れていることが、なぜかわかったのでしょうか。表情からか歩き方が変わったのか、いずれにしろ、ものいぬぬ幼い子どもの様子から、おむつが濡れたらしいとちゃんと見抜いたのです。そして気持ち悪いだろう、とり替えてもらいたいだろうと思つたのでしょう。しかし、自分はおむつを替えてやることはできないので、そこで自分ができる精一杯のこと——おむつをとって、先生を連れて来ることを、黙々とやっていたのです。

その男の子も幼いときからその保育園で育っていました。ですから、自分も先生におむつを替えてもらって気持ちよくなった遠い思い出があるのでしょうか。一方、幼い子どもたちを日々みていて、子どもは何が好きで何を求めているのか、何をしてもらって満足しているのかなどを、自分のことのように知るようになったのでしょうか。

自分の心の働き——嬉しいこと、嫌なこと、気持ちのよいことなどを誰しも実感して知っています。これは動物でもすること、できることです。ところが人間だけは、それ以上のことを知るようになります。他人がどう感じているか、どのような気持ちでいるかなど、他者の心がわかるようになります。「心の理論」といわれます。人間の子どもは、かなり早くからこの力をもっています。いろいろな年齢の子どもがいる保育園では、先生から世話を受け、友だちから何かしてもらった嬉しい体験や、逆にけんかなど自分と他者との対立

幼児教育専攻

(八枚の五)

も経験します。こうした豊かな対人関係は、他者の心を敏感に察する力を育む場でもあります。そして他者の心に応えようとして、その人のために精一杯の力を出して援助する態度も育まれます。

すぐ傍にしながら、小さい子どもの不快な状態を察することのできなかった私は、それだけにこの四、五歳の男の子のふるまいに感動を覚えたのです。親はみな子どもに対して「相手の気持ちを考えて」とか「人に親切に」などといいます。相手の身になったり、困っている人を助けるといったことが大事なことは、誰も異論はありません。けれども、そうした心や力を身につけさせることは容易ではありません。口でやかましくいってもほとんど効果はありません。対人的な環境や対人的な体験が豊かな集団保育の場で、家庭ではなし得ない心と力を子どもが育んでいることを実感しました。子どもは集団の中で学ぶということを改めて体験的に気づかされました。

(注) 制度改正に伴い、文中では、現在の保育制度とは異なる言葉が使われている。注は引用者による。

出典 柏木恵子著『子どもが育つ条件——家族心理学から考える』岩波書店

二〇〇八年 一七六一―一八五ページ 一部改変

問一 傍線部①「自らの発達の能動的プロデューサー」という筆者の主張の意味を、一五〇字以内で説明しなさい。

問二 傍線部②「子育ての社会化」とはどのようなことか。文中の言葉を使って、一二〇字以内で説明しなさい。

問三 この文章は二〇〇八年に出版されたものであり、現在は当時の想定以上に少子化が進んでいる。このことが子どもの発達に及ぼす影響をふまえ、幼稚園や保育所等に求められる役割について、三〇〇字以内であなたの考えを述べなさい。なお、本文の内容を適宜引用して書くこと。

六、八枚目は下書き用紙のため省略します。

令和八年度 学校推薦型選抜

小論文

試験問題

発達障害教育専攻

注意事項

- 一. 監督者の指示があるまで、試験問題を開いてはいけません。
- 二. この試験問題の表紙に記載されている専攻が、自分が受験する専攻と一致しているか確認してください。
- 三. 試験問題と解答用紙は別になっています。
- 四. 試験問題は表紙を除いて七ページ（下書用紙を含む）、解答用紙は三ページとなっています。落丁、乱丁及び印刷不鮮明な箇所等があれば、すぐ申し出てください。
- 五. 監督者の指示に従って、解答用紙すべてのページに受験番号を必ず記入してください。氏名を記入してはいけません。
- 六. 解答に字数制限がある場合、句読点は字数に数えます。
- 七. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。試験問題は持ち帰ってください。
- 八. その他のことについては、監督者の指示に従ってください。

発達障害教育専攻

(七枚の一)

次の文章を読んで、後の問題一～三に答えなさい。

(当事者)^{注一}運動は、「当事者は、自分のことや、自分のニーズをすてによく知っている」という前提のもとで、ニーズを達成するために必要な支援や、社会環境の改善を主張する実践といえる。

しかし、「自分のことや自分のニーズをすてによく知っている」という前提条件を享受できるのは、自分の障害の特徴やニーズを記述(可視化)できる、いわゆる、「見えやすい障害」をもつ当事者に限定される。

また、当事者運動が重要視してきた「自己決定の原則」に関しても、自己決定が可能になる前提条件として、自分の身体の作動について「こうすれば、こうなる」という予測がある程度ついている必要がある。なぜなら、自己決定が可能になるためには、選択肢の決定とその帰結をつなぐ「予測」を、ある程度もっていなければならないからだ。

このようにして、「私のことは私が一番よく知っている」前提のもと、自己決定の原則を掲げ、社会変革を要求していくという^①当事者運動の手前で、「見えにくい障害^{注二}」をもつ当事者は、置き去りにされる可能性が高まる。

このような問題を、筆者は以前、以下のように述べた。少し長いが引用しておこう。

私のことは、私がいちばんよく知っている。

私が何者であるか、私が何を行うかは、私が決める。

当事者運動の精神ともいえるこの標語に、私は何度も助けられてきた。私たち障害者は、自分たちについての知識も、自分たちをどう扱うかについての統治権も、専門家たちに奪われてきた長い歴史を持っている。私たち障害者から発せられる言葉は、無視されたり、ゆがんで解釈されたりした。水を飲むタイミングも、トイレに行く段取りも、果ては生きていてよいのかどうかさえ、介護者の顔色を見ながら決めなければならなかった。

そういった歴史を、過去のものというよりは、いつ何時でも再び自分に襲ってくるかもしれない潜在性としてひりひりと背中に感じ続けて生きている障害者たちにとっては、自分についての知や統治権を、確かに我がものであると確認し続けることが、生き延びるために必要不可欠なのである。

発達障害教育専攻

(七枚の二)

これまで当事者運動をリードしてきたのは、身体障害者が中心だった。その中には、二四時間介助が必要な重度の障害者もいた。彼らは、「私の身体が悪いのではない。このような身体の持ち主が障害を感じるように設計されている、社会のほうに問題があるのだ」と主張した。彼らのラディカルな価値転換と、実際に社会の中に生存可能な仕組みを作り上げた運動のおかげで、私は今、自由を感じながら生きていられている。

しかし、この標語について「これで十分である」と言い切れる者は、知らず知らずのうちにある前提条件を享受している相対的な強者であるということも、また事実だろう。障害者かどうにかかわらず、生きていれば「自分が何者なのか」「何を望んでいるのか」「何を行うべきなのか」について、しばしばわからなくなり、立ち止まってしまうことがある。そのとき、私たちはこう言わなくてはならない。

私は、私のことをよく知らない。

私が何者であるか、私が何を行うかを、仲間と共に探る。

②当事者ニーズを踏まえた支援を、とよく言われる。しかしニーズとは、いつも当事者にとって自明なわけではない。「ああいう状態になりたい」「こういう行いを行いたい」という形でニーズが表明されるためには、「その状態や行いを選択すると、自己身体や世界にどのような帰結が訪れるか」について、ある程度の予測が成り立っている必要がある。したがって、選択と帰結をつなぐ予測モデルが不安定な場合には、名状しがたい苦しみだけが感じられて、それを他者に伝える言葉も、具体的にどうしてほしいかのニーズの表明も、まなまなくなることもある。

とりわけここで注意を喚起しておきたいのは、「障害の重さ」という次元と、予測モデルの不安定さという次元は、異なる」という点だ。障害が重くても、その障害の日内変動や進行具合が小さい場合、「私の体はこのような行動をするだろう」という予測モデルは安定する傾向にあるだろう。しかし一方で、障害そのものは軽くても、「天気が良ければ歩けるが、雨の日は車いすが必要」「理由はよくわからないが動ける日と動けない日がある」「見えにくい障害であるため、周囲がすぐに障害の存在を忘れて接してくる」というように、予測モデルが不安定化する場合もある。

発達障害教育専攻

(七枚の三)

そして、先述したようなニーズ以前の困難は、障害の重さというよりも、予測モデルの不安定さによって大きくかわっているのではないかと私は感じるのだ。しかし障害の重さに比べ、不安定さという次元はこれまで注目されてきたとはいいたい。この不安定さの次元を考えると、当事者研究という実践の意義が生まれると私は思っている。

別の言い方をすれば当事者研究は、運動の中で重視されてきた「自己決定」や「自分を知っている」という状況が可能になるための前提条件にまでさかのぼって、当事者運動の思想を徹底しようとする取り組みといえる。それは当事者研究において、「自分のことは、自分がいちばん」わかりにくい」というリアリティを共有し、「自分のことは自分だけで決めない」という原則が強調されている点からも、うかがい知ることができる。

出典…熊谷晋一郎『当事者研究 等身大の「わたし」の発見と回復』岩波書店 二

〇二〇年

〔原文の小見出し省略〕

注一 〇内は原文にはないが、前後関係から補足したものである。

注二 見えにくい障害とは、単に、見た目ですぐにそれとわからない障害ということだけを意味しているのではない。自分の変えがたいパターンやニーズを表現する言語がいまだに存在していない、あるいは、存在しても広く知られていない、という状況も含まれる。また、一人の中に、見えやすい障害と見えにくい障害の両方が共存していることが一般的である点にも注目する必要がある。たとえば、脳性まひを例にとっても、「移動や動作レベルでの障害」は比較的に見えやすいが、「原因のわからない痛み」については、パターンや対処法、ニーズがいまだ不確定で、見えにくいものだといえる。

発達障害教育専攻

(七枚の四)

問題一 傍線部①について、置き去りにされる可能性が高まる理由を、一〇〇字以内で説明しなさい。

問題二 傍線部②の当事者ニーズを踏まえた支援について、当事者研究はどのような役割を果たすことが出来ると考えるか、本文を参考としてあなたの考えを二〇〇字以内で述べなさい。

問題三 当事者研究を障害のある子供の指導・支援にどのように活かしたいと考えるか、あなたの考えを四〇〇字以内でまとめなさい。

五、七枚目は下書き用紙のため省略します。